

餘歩、曰清左湯、舊稱法齋湯、以石投之即涌  
 石堆井填、遊者傾耳聽其沸聲已、皆硫黃泉、  
 性味與湯池迥然、(迥異歟)……東行三里、  
 謁伊豆下祠、々距上祠磴道五百餘級、……  
 又降二百餘級、瀑瀑布泉而還、瀑布泉前臨絕  
 海、後倚洪崖、竹樹蒙密、過午不見日影、岫  
 下之洞、深十五步、泉開其中、瀼々分流、受  
 而灑之、上瀑濺々、有屋而槽焉、下瀑特大、  
 奮迅落於海畦、亦硫黃泉、微有瘴氣、其色清  
 白、溫暖甚適人、

此の記事から熱海溫泉當時の狀況を考ふるに  
 今の阿保、志村等諸邸の在る邊は草むらで、野  
 中湯の名の如く處々に溫泉の噴出してゐたので

## 箱 根 温 泉

(秋里籬島)

一、蘆の湯 七湯の其一箇なり。權現阪より  
 これまで一里、浴屋は町の中にあり。一二三と  
 仕切て入湯す。氣味澁く苦し、又硫黃の香強し

ある。今回其邊に龜裂が出来て溫泉の噴進した  
 のは怪むに足らぬ。平左衛門湯清左衛門湯は其  
 に微々たる湧出に止つた。而して此の時には大  
 湯は十畝ほどの面積に木柵をめぐらして、其内  
 に涌出口が沈澱物で石の如き塊を造り、中央が  
 凹んで三尺ばかりの深さで十尺許の徑の池とな  
 り、其上に石を積み重ねて噴出を妨げて流れ出  
 す湯を笕で引いたものと思はれる。

此の晝夜六回の湧出は明治十一年まで同様に  
 長湧きも十二時間許續いて其後五七日位湧出不  
 規則となることも慊堂の記載と同じことであつ  
 た。

流れ湯みな黄色なり。功能は癩病、微病、五痔  
 一切の腫物に相應して早く治す。浴屋の前兩側  
 に一町許入湯の宿舍ありて奇麗なり。



小地獄 蘆の湯より八町許にあり。山腹に湯氣盛んに立て手を入れるればはなはだ熱し。按ずるに積陰こり集りて火氣を生じ、土精熱して硫黄となる、これ温泉の源なり土人云鍛冶屋の地獄、酒屋の地獄、紺屋の地獄ありといふ。地氣少しづゝ色變るなり。又これより山奥五里許に大に地氣立昇る所ありとぞ。里諺にこれを大地獄とよぶ。

二、氣賀の湯 蘆の湯よりこれまで一里なり此間に明礬を製する所あり。氣賀の中に岩湯、上の湯、平の湯、大瀧等の四ヶ所あり。いづれも氣味鹹しで明礬の香あり、中風疝氣を治す。

三、底倉の湯 氣賀より半里、中むかし地震ふて名物石風爐も絶て、今纔に内湯二三ヶ所あり。此所の民家箱根名物挽物細工を業とす。

四、宮の下湯 底倉湯より二町許にて大略家續きなり。内湯瀧湯あり。内湯とは温泉の水脈より樋にて家々にどり入湯す。瀧湯とは樋より算によりて家内にて瀧のごとく温泉を落しこれに打るゝなり。頭痛痲痺腰の痛を治す。打るゝ

に氣味快きものなり。

五、堂が島の湯 宮の下より五町ばかり山下なり。内湯瀧湯あり。氣味鹹はゆくして積聚疼痛を治すなり。

六、塔の澤の湯 堂が島より一里半あり。七湯の内にて地境廣くして風景の勝地なり。山を勝簾山と號し、川を早川といふ。

いさよひ日記

あつま路の湯坂をこえて見たせば

しほ木流るゝ早川の水 阿 佛

橋を玉緒橋といふ、水戸黃門光國卿明人舜水と共にこゝに逍遙したまひ、此號をはじめて呼せらる。浴舎美麗にして廣く、書院數寄屋庭中何れも佳景なり。江府より諸侯時々こゝに湯治したまふ。元湯を秋山彌五兵衛一の湯を小川澤右衛門、内湯は田村久兵衛、藤屋喜八、喜平治小兵衛等なり。都て家數二十三軒あり。此温泉は氣味軽くして養生湯なり。諸病を治す。

七、湯本の湯 塔の澤よりこゝまで十町あり町の中に浴屋ありて四間に仕切る。内湯も二

三ヶ所あり。腫物、瘡毒、微病の類によし。これより三枚橋へ五町許あり。蛆を歩みて橋の東爪へ出る。これより本道東海道なり。

(東海道名所圖會寛政九年版)

此の文は今から百二十八年前に著者の京都から江戸までの道中名所を探つた紀行の一節である。數年前に我々は久し振りで一寸と行つたが、山を掘り割り鐵道を敷き電車を通じて、登山電車が湯本から強羅まで開かれて、遊覽の便が

## 温泉めぐりのちみ草

### 一、箱 根

憶ひ起して面白いのは學生時代の草鞋旅行で旅屋で門前拂を喫つたのも忘れられぬ一興である。ある夏興津から降りて風祭塔ノ澤の安山岩をドウラン 未だリユッツザックは使はぬ時代であつた)に一杯詰めて重い足を引すつて宮ノ下奈良屋の玄關に行つた時の箱根旅行は今も記憶に新たである。其時近年薨去された某元老夫人の義弟に當る同窓が黒モーニングで故夫人の三

出來た。されど民衆化して行くといふよりも、低級な遊客が當時の世間の空景氣に浮かれた雜踏であつて、塔の澤の一旅館で一夜の全く夢を結ぶことの出來ぬ喧噪に苦しんだ。其の後大地震で全潰れになつたといふ報を聞いて、寧ろ此の如き俗惡なもの、破壊が緊張した人心と共に新しく改造される氣運を成すべきを悦んだ譯である。復興した箱根の景況が如何であるかを知らぬ。(如舟)

太夫格で陪從して來て居たのに會つた。己れが談判してやると何時もの義俠を賣り物に半かぢりの法學通論を振りまわす癖が幸で、番頭のお生憎様に承知せず、どうも、相宿で泊れた。

その相宿の客は徳川譜代の上州某の城主何代かの後裔某子爵で、とり巻きの老人と二人きりといふ氣樂な殿様で、書生の我輩と鼎坐して、氣焰萬丈の上機嫌であつたので、數日間八疊二間の座敷にのんびりと休んだ。毎朝同窓と夫人